

警官の朝飯はコーヒーに浸けたオールドファッションドーナツと決まっている。

昼下りの街角、白塗りのパトカーの中に2人の青年警官がいる。

運転席にはダークブラウンのボサ髪と眠たげな目の中華系、助手席にはピンクゴールドの猫っ毛に柔らかな面立ちの白人。着ているのはブルーグレイの市警の制服だ。胸に輝く徽章は巡査の階級を示す。

二人とも市警のバッジが付いた八角帽を被り、細腰に巻いたベルトにS&Wモデル39を装備している。

助手席の警官が貧乏性に紙コップのコーヒーを啜り、ドーナツを口に運ぶ。

「警官の何がいつて、ドーナツとコーヒーが食べ放題なところだよな」

「それが目当てか」

「動機の一部ではある」

「素直でよろしい」

ヘルウッドの街では警官を対象にドーナツとコーヒーの無

料提供を実施しており、彼らも専らその恩恵に浴していた。

ヘルウッドの治安は良くない。というのは随分穏便な表現で、端的に言って悪い。

街にはドラッグと銃が蔓延し、毎日のように人が死ぬ。ギャングの抗争も日常茶飯事だ。映画産業で発展した華やかな表の顔と裏腹に、風紀は乱れまくっている。

ピジョンと劉は風紀課の相棒同士。

今は巡回の帰り道、街角にパトカーを停め休憩しているところだ。

ドーナツに夢中なピジョンの横顔をハンドルに突っ伏し眺め、既にして胸焼けしたように劉がぼやく。

「毎日よく飽きねえな」

「ただでもらえるんだから食べなきゃ損だろ、食費も浮くし」

「見てるだけで胃もたれする」

「劉はドーナツ嫌い？」

「甘いものはあんまり。パンダエクスプレスの方がいいな」

「チャイニーズもおいしいよね。炒麺とか」

劉がダッシュボードに置いた紙箱を掴み、伸びきった麺を割り箸に絡めて啜りだす。

ピジョンはそれを物欲しそうに眺めていたが、自分が独占するのも気が引けたか、箱詰めのだーナツを摘まんでみせる。

「一口食べる？」

「らはらいらねーっへ」

「そっか。じゃあ」

炒麵をもごもご頬張る劉に拒否され、スプリングルを塗したチョコレートドーナツをひと齧り。

「ハードな仕事だからカロリー蓄えとかないとね」

警官とドーナツは相性がいい、パンケーキとメープルシロップ位ナイスなコンビだとピジョンは勝手に思ってる。

「ご馳走さん」

劉が無造作に割り箸を投げだす。炒麵を食べ終えるやシートを倒して仰向け、頭の後ろで手を組む。

「着いたら起こしてくれ。寝るわ」

涙をにじませてあくびを一発、うとうとまどろむ相棒をバックミラー越しに一瞥、ピジョンが口を開く。

「このあと予定は？」

「署に帰ったら始末書の山が待ってる」

「何したんだよ」

「セレブの駐車違反取り締まったクレーム。署長の友人なんだと」

「ご愁傷様」

「お前は？」

「とりあえずシャワー浴びたいな」

勤労意欲のかけらもなく生あくびを連発する劉に苦笑い、ピジョンが希望を述べる。

フロントガラスの向こうには荒廃したダウンタウンの光景が広がっていた。

ティーンエイジャーの不良がスケボーで滑走、消火栓に飛び乗ってアクロバティックなパフォーマンスを決め、仲間とハイタッチを交わす。

「そーいや劉、こないだの手入れ覚えてる？ チャイニーズマフィアの」

「空振りしたアレか」

「情報の漏洩が疑われている」

「誰かがネタ流したっつてか」

「君じゃないの」

不意打ちで核心を突く。劉が片目を開き、意味深にピジョンを見る。

「は？ なんて。証拠は」

「賄賂もらってるの見たぞ」

「あー……じゃあしようがねえな」

劉が舌打ち、シートに寝転がる。ピジョンは大袈裟にため

息を吐く。

「不良警官め……減俸や始末書で済めばいいけど、下手したら犯罪幫助で刑務所行きだぞ。相棒の誼で忠告しとくけど、そういうのはやめろよ。腐っても警官だろ」

「同郷の誼で泣き付かれちゃ断れねー」

「国なんて帰ったことないくせに」

ピジョンが口を尖らせば、制服の胸ポケットを探つてよれた煙草を取り出した劉がわざとらしく嘆く。

「女房やガキはどうでもいいってか？ 稼ぎ手がブタ箱にぶちこまれたら路頭に迷うぜ」

「まっとうな職に就いて家族を養えばいい」

「貨物船のコンテナで密入国してきた連中にまともな働き口があるってか」

「それは……」

鋭い皮肉の切り返しに言葉が詰まる。

劉がライターを苛立たしげに押し込み、よどんだジト目で紫煙を燻らす。

「世間の目は移民に厳しい。3Kの薄給でこき使われてポイ捨てがオチ」

「言い分はわかるけど」

「嫌でもギャングの使いっ走りになって、汚れ仕事に手染めなきやおまんま食わせてけねーの」

反省の色など全くなく開き直る。

チャイニーズマフィアを相手に情報屋のまねごとをしている相棒の身を危ぶむものの、それ以上は強く出れない。

ピジョン自身は強い正義感の持ち主だが、世の中が綺麗ごとだけで成り立たないのは痛感している。

正義と正論がイコールなら誰も悩まないのだ。

劉が帽子の庇の下からチラチラ見てくる。

「上にチクるか」

「見損なうな」

「いい相棒を持って幸せだよ」

紫煙に乗じる吐息に安堵が滲む。

渋面を作ったピジョンは、相棒への甘さを自虐しながら苦言を呈す。

「今回だけだぞ」

実にちよろい。目元にかかる前髪の下で劉はうつそりほくそえむ。

ピジョン巡査は死ぬほどお人好しであり、情に訴えられたら即オチだ。

彼自身がトレーラーハウスで産声を上げた、娼婦の私生児というのも関係しているかもしれない。差別や貧困に苦しむ人々を助けたくて警官になったのに、捜査の大義で追い詰めては本末転倒だ。

「君のためじゃないからな。旦那や父親が犯罪者だからって、関係ない家族まで道連れにするのは本意じゃない」

敵しい口調で注意するものの、劉は「ハイハイ」といい加減に聞き流す。

不真面目な態度に反感を持つて腐す。

「袖の下欲しいだけだろ」

「否定はしねエしできねエな。一応言つとくけど、俺以外のヤツだつてみんなやつてる」

「みんなつてのは誇張表現だな。俺は入つてない」

「殆どみんなさ」

警察の腐敗と墮落は深刻だ。

殆ど唯一の例外のピジョンを除き駐車違反の見逃しは当たり前、潔癖が過ぎて融通が利かない彼にとつては苦々しい限りだが賄賂と引き返れば大抵の犯罪は見逃される。

劉の手入れの日時漏洩も警官としてあるまじき言動なのは否めないが、限りなく黒に近いグレイゾーンに目を瞑るのも事なかれの処世術ではある。

ピジョンは憮然とし、口元に塗された砂糖を指で拭く。